

ダーモスコピーの活用を

皮膚疾患の診断には症状を詳細に観察するという視診が重要であることはいうまでもない。とくに腫瘍では、悪性であるか良性であるかどうかの判断が治療、予後に関連してくるので、慎重に見極めねばならない。色、形、表面の性状など、臨床的特徴を観察し、診断の根拠をつかむようにしている。かつては拡大鏡を用いて表面の性状を観察していたものであるが、近年ではダーモスコプという観察専用の機器が診察机に置かれるようになった。これにより、皮疹の10倍から50倍の拡大像をみることができ、皮膚の表層の変化のみならず、真皮上中層の光が到達するまでの拡大情報が得られ、毛細血管の状態が把握でき、肉眼観察よりもより詳細な皮膚の性状をみることが可能になった。表層を透見して観察する診断法として、簡便な手段であることより、とくに色素性病変の診断の確定のために、広く用いられるようになっていく。そして、ダーモスコピー所見を参考にすることにより、日常診療において皮膚疾患の臨床をみる目がさらに鍛えられることにつながってくる。

ダーモスコピーは色素性病変の観察に有用であるが、血管病変その他さまざまな疾患に対して観察されるようになった。ことに、悪性黒色腫、基底細胞癌などの腫瘍病変では病理組織検査を行うことにより確定診断をすることができるが、その前に悪性か良性か、色素性母斑との鑑別はどうか、などの術前診断の根拠となる情報がダーモスコピー所見により得られることから、是非行ってもらいたい検査である。診断に有用であることより、本邦では2006年に保健診療として採用されるようになった。

そこで、このたびはこれまでに本誌に掲載された症例報告の中から、ダーモスコピーの特徴的な写真が載っているものを集めて1冊にまとめてみた。できるかぎり多くの疾患の症例をみたいので、足りない疾患については東邦大学の福田英嗣先生の症例、千葉大学の外川八英先生の症例を引用させてもらい、数多くの疾患についての定型的な所見を提示することができた。また、ダーモスコピーの総説は信州大学の皆川 茜先生にお願いした。その他、記載するときの特有な用語や表現方法については、それを理解してもらうために用語の解説を行い、理解の手助けになるよう構成した。

この1冊を手にするにより、ダーモスコピーの有用性を理解し、極めて簡便な検査手段であるので、日常診療に活用し、診断の精度を上げて欲しいものである。

この特集号を作成するにあたっては福田英嗣先生に多大なご尽力をいただき、感謝申し上げます。

齊藤 隆三